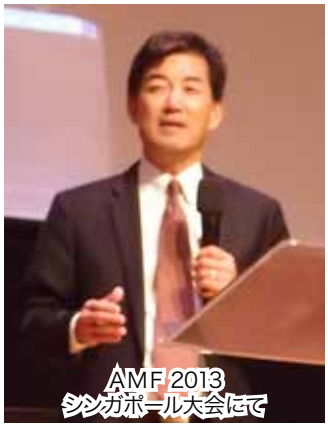
NEWS FROM ZION
シオンとの架け橋ニュースレター　第 40 号　2013 年 12 月（年 4 回発行）

アジア・メシアニック・フォーラム 2013 シンガポール大会特集号

信仰による行いの回復

カルメル・アセンブリー　ピーター・ツカヒラ


AMF 2013
シンガポール大会にて

新約聖書の、異邦人へのメッセージでは信仰が強く強調されていますが、ユダヤ人に向けてのメッセージは信仰より行いに重点が置かれています。その理由は、エペソ人への手紙 2 章を読めばよくわかります。異邦人は長い間神を知らずに生きてきたので、まず信じて受け入れることが大切なのです。

しかし、福音は信仰がすべてではありません。信仰だけで神の国に入ることができますが、入ってからなすべき事があります。私たちは信仰によって福音を受け入れたら、福音に従って行動すべきです。そしてその方法を知るために、ユダヤ人の眼で聖書を読む必要があります。ユダヤ人に向けられている新約聖書のことばは、神の国に入ってからの行いについて記されています。

福音が伝えられて、異邦人が暗闇から抜け出し始めてから約 2000 年が過ぎました。現在のキリスト教は初代教会時代のユダヤ人と同じように、口では「信仰」を語っていますが、行いが伴っていません。

■新約聖書に見る行いの重要性

いくつかの新約聖書の聖句を引いて、信仰のみを重視する事の間違いを指摘したいと思います。良きサマリヤ人のたとえの箇所（ルカ 10:25~）では、律法学者の質問が「何をしたら」であることに注目してください。イエスが質問で返されたので、律法学者は、イエスがマタイの福音書 19:17 で用いたのと同じみことばで答え、イエスはそのとおり「行えば」いのちが与えられると答えています。「信じれば」とは言っていないのです。

ユダヤ的ルーツの回復の中には、このようにユダヤ人の眼で聖書を読む事も含まれます。イエスはこの二つの律法を行えば天国に入ることができると言ったと読むのが素直な解釈です。そこに、たとえ話が続きます。ここでサマリヤ人が登場しますが、イエスが意図的に、誤った神学を持った人を登場させていることに注意してください。このたとえは、神学を重んじる律法学者に、神学より行いが重要であると語っているのです。最後にイエスは、「同じようにしなさい」と言っています。この会話は初めから終わりまで、信仰ではなく行いに関するものです。そして、当時のユダヤ教と同様に宗教として成長してきた現在のキリスト教にとっても、この観点は重要です。

マタイの福音書 25 章の、最後の裁きに関する三つのたとえを見てみましょう。10 人のおとめのたとえでは、思慮の浅い女と深い女の信仰や考えに違いはありません。共にキリストの再臨を信じ、迎えようとしたのですが、思慮の浅い女は準備の行いが不十分だったのです。タラントのたとえでも、3 人ともが、主人から預けられた財産を大切だと考え、主人に評価されたいと思っていました。違いは行動を起こしたかどうかだったのです。羊と山羊のたとえでも、両者の考え方に違いはなく、両者を分けたのは行いであることがわかります。

■信仰偏重が教会にもたらしたもの

異邦人クリスチャンは、長年にわたって信仰だけを強調してきました。私は 30 年以上の牧会で、いくつかの事を信じ、献金して礼拝に来ればよいと教えて来たことを恥じます。教会がそのような事を続けてきた結果、社会の中心として変革をもたらすべき教会が今や社会の隅に追いやられているのです。

しかし、これは私たちの王の命令ではありません。ユダヤ人には、そのように命じてはおられません。私たちは「神の国に入る」だけという段階にいつまでとどまるのでしょうか。ユダヤ的ルーツにつながろうとしている私たちは、次の段階に成長します。ユダヤ人にねたみを起こさせるためには、彼らができていない行いをすべきです。そのために、信じていることを毎日、そして最後まで実行して行くべきです。その日には、私たち全員は王の前に立ち、行いの報告を求められるのです。

ユダヤ人が選ばれたことについて、えこひいきだと言う人がいますが、彼らは 3000 年間、他の民族ではありえない大きな苦しみを味わいました。それは、彼らの行いが正しくなかったからです。ところが今日の教会では信仰ばかり教えて、行いといえばわずかな献金と礼拝に来る事だけなのです。皆さん、これは恥ずべきことです。神は義なる神で、えこひいきをされる方ではありません。私たちは、今自分たちが持っている力を知ってそれを使えば、全世界を変えることができるのです。

■行いがなければ信仰ではない

ヤコブの手紙 2:14 に、「ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか」とあります。行いのない信仰は、死んでいるのです。現在のキリスト教には、律法主義に陥らない健全な行いが復興されるべきです。

人が義とされるには行いも必要です。ヘブル人への手紙 11 章に現れる人々は、信仰を行いで表したからヒーローなのです。私たちはこの立場からあまりにも遠く離れてしまいました。今こそ信仰による行いを回復し、終わりの日に、キリストから「良くやった」と言われたい。各自の与えられた場で信仰を行いとして表す事、これが神の王国の回復です。私たちは社会全体の模範となるべきなのです。そのための力として、私たち一人ひとりは召され、能力を与えられ、油そそぎを受けており、終りの日には報告する責任があるのです。これが、聖なる民、祭司の国になるという事なのです。

私たちは行いによって、再臨の準備をすべきなのです。

※ AMF2013（P2~5、12）3 日目のメッセージ（2）の要約です。

■大会の記録

開催日時：**2013 年 11 月 19 日（火）午後 7 時 30 分 ～ 22 日（金）午後 1 時**

開催場所：**コーナストーン・コミュニティ・チャーチ**

参加者数：午前・午後の有料セッション　約 500 人
夜の無料セッション　約 600-800 人

国外からの参加：22 カ国　アメリカ、イギリス、イスラエル、インド、インドネシア、オーストラリア、カナダ、韓国（約 10 人）、カンボジア、タイ、台湾、中国、日本（約 50 人）、ニュージーランド、ネパール、パキスタン、フィリピン（約 40 人）、ブルネイ、香港、マレーシア、南アフリカ
（国外からの参加者約 10 人以上の国のみ人数を表示）

AMF シンガポール大会のためにお祈りいただき感謝します。とても盛況で祝福された聖会となり、大会経費も全て満たされました。900 人収容の会堂が、夜にはほぼ満席になりました。国外からの参加者も多く、台風が直撃したフィリピンや、クリスチャンが激しい迫害を受けるパキスタンからも参加がありました（関係者の感想を 12 ページに掲載）。

1 日目（11 月 19 日）

■オープニング

名古屋、大阪、仙台、東京、ソウルと各都市を回って来た大会旗が、シンガポールの人々によってステージに運び上げられると、歓声が上がりました。そして、村岡大輔牧師の開会祈祷と開会宣言で大会は始まりました。

賛美礼拝のあと、ビデオ「イスラエルへの祈り－時を越えて」を 9 分半に再編集したものを上映。その後、日本チームから AMF の始まった経緯の説明がありました。2009 年の初回の開催後、主の導きによりもたらされた日韓の和解から、持ち回り開催への道が開かれたとの説明を聞き、集まった人々は、この集会が、神の業であることを理解されたようでした。実は、シンガポールもまた、日本軍により多くの民間人の血が流された地で、AMF の会場のあるカトン地区も、まさにその惨劇の舞台だったのです。

今、AMF 以外にも、イスラエルに関するさまざまな聖会がアジア各地で開催されているのは、まさに神の時です。日本で小さな働きをしていた私たちは AMF によってアジアでの神の御業に目が開かれました。だから皆さんも、AMF を通じて、神の御業を体感してほしいとの呼びかけに、多くの聴衆がうなずいておられました。

■ヨセフ・シュラム師（1）

シュラム師の初日のメッセージは「聖霊の第 4 の波」。これまでの聖霊派のリバイバルは、確かに聖霊の働きでしたが、自分が祝福されることが主眼で、それ故に一時的なリバイバルに終わったと、シュラム師は分析されました。

次の新しい波は、欧米から始まるのではなく、イスラエル、エルサレムから来るはずだと指摘。これから起こるリバイバルは、自分の救いではなく、自分を犠牲にして神の国に仕えるという信仰姿勢が特徴になる。

また、西欧の長いキリスト教史の中で生まれた教派の壁を打ち砕くべきだと、シュラム師は力強く語られました。

■ジャパンデスク

受付の「ジャパンデスク」に置いた約 20 枚の「イスラエルへの祈り」DVD は、集会終了後の数分で完売。受け付けスタッフは、「売り切れて申し訳ありません」という説明に追われました。シオンとの架け橋の英語版チラシも、50 枚しか持って行かなかったため、2 日目にはなくなってしまい、白黒のコピーで増刷してしのぎました。

2 日目（11 月 20 日）

■フィリピンからの報告

前回の大会までは、全参加国に 10 分程度の報告の時間が割り当てられましたが、今回は一部の国にしか枠が与えられず、少し残念でした。時間の関係で仕方がありません。

トップバッターは、次回の開催地となるフィリピン。1990 年代に、イスラエルに関するバランスを欠いた教えがフィリピンに入って来たため、懸念を感じて教育活動を開始したと、報告者のビューラ・バドゥア師は語って下さいました。

フィリピンでは、イスラエルを愛する多くのクリスチャン団体があり、多様な集会が開催されています。大使を招いた集会などについても報告がありました。

■ジョージ・アナドライ師

ジョージ・アナドライ師

美しい白髪で独特の風貌を持つアナドライ師は、日本にも来られたことがあり、ご存知の方も多いと思います。アナドライ師はイスラエルに関しても強い思いを持っておられると感じました。

アナドライ師は、サッカーの試合にたとえて、前半、ハーフタイム（休憩）、後半という順序で神の世界救済計画は進んで行くという解釈を語られました。

私たちは「ユダヤ、サマリヤ、地の果て」まで福音を伝えよと命じられていますが、この「地の果て」という言葉は単数形なのです。地球は丸いので、エルサレムから見た「地の果て」は 1 点で、それは太平洋にあります。ここに福音が伝えられたのは 19 世紀末で、ちょうどその時、シオニスト運動が始まりました。これが前半の終わりだと、師は分析されました。それから、イスラエルの建国を経て現在までは「ハーフタイム」。それがもうすぐ終わり、これから後半が始まるの

だと、師は語られました。

前半は、どちらかというと教会の負け。後半は戦術を変えないと、試合には勝てず、変革が必要だというのです。

■ピーター・ツカヒラ師（1）

アナドライ師のメッセージを受け、ツカヒラ師が語られたメッセージは「パラダイムシフト」。まず、2012 年に倒産したイーストマン・コダック社について、同社が 1975 年に世界初のデジタルカメラを開発していたという、驚くべき事実を指摘されました。同社はデジタル化に乗り遅れました。いくらでもデジタル技術で先行する機会はあったのに！

イエスがニコデモに「新しく生まれる」と話されたのは、パラダイムシフトです。私たちクリスチャンも、今までの考え方を捨て、新しい考えを受け入れる必要があるのです。

■ヨセフ・シュラム師（2）

シュラム師は、その「パラダイムシフト」として、ユダヤ的な観点から聖書を読むべきだと語られました。まず「からし種のたとえ」を例に、からし種＝信仰だとする常識的解釈の矛盾を指摘。「植物のうちで最も小さい種」「成長すると最も大きくなる」という記述が、実際の植物であるからしに合わないことを指摘されました。そして、からし種とは、ユダヤ民族のことであると語られました。

続いてイザヤ書 49 章にある通り、ユダヤ人を慰める使命を異邦人は与えられており、それはユダヤ人が「世の光」になるという、民族的使命完遂のためなのだと語られました。

シュラム師のメッセージは、今回来日時のセミナー「エレミヤに学ぶ」（P6）と重なる部分が多くありました。

■アリ・ソーコラム師（1）

アリ・ソーコラム師

ソーコラム師は、もともとハリウッド俳優。そう聞くと、派手なアクションでメッセージを語られるかのように思いますが意外にも、静かに理路整然と語られます。

さすがに映画界出身だけあって、録画、録音に気を使われるのが師のスタイル。ネクタイは不要、との主催者の指示にもかかわらずネクタイをし、両手が使えるように、特別のマイクを使用されました。

師の三つのメッセージは「イスラエルに関する極端な教えを排し、健全なイスラエルの神学的理解を持つ」のが狙い。感動するというより、納得して聞くというメッセージでした。さまざまな講師の、多様なスタイルを通して、イスラエルを立体的に理解できるのが AMF の良いところです。

ソーコラム師が最初のメッセージで強調されたのは、神がご計画によって、人をそれぞれの人種に創造しておられるという大原則。だから、私たちは人種も性別も変更する必要がないのです。

異邦人がイスラエルと一つになったというのは、イスラエル人になったのではなく、イスラエルの連邦（Commonwealth）になったのだと師は教えられました。英国女王のもとにイギリス連邦が構成されていますが、連邦に属するカナダもオーストラリアも、英国とは別の国なのです。

日本からの参加者による特別賛美

■日本チームの特別賛美

夜の特別賛美の時間には、日本チームの有志が前に出て、「イスラエルの救い」を合唱しました。まず最初に、歌の趣旨を説明し、おりかえし部分の「祈らん、祈らん」は会場の人々にも加わっていただくようにお願いしました。会場の人々も熱心に応答して下さり、とても盛り上がりました。

長年、日本で歌い継がれて来たこの歌がシンガポールで、イスラエルを愛するアジアのクリスチャンたちと共に歌われたのは、本当に感動的でした。

■韓国からの報告

夜のセッションには、韓国のプレゼンテーションがありました。発表したのは、前回の韓国 AMF 大会を主催して頂いた IMN（イスラエル・ミニストリーズ・ネットワーク）の、キム・ヨンデ師とイ・ジェハ師です。

以前に本紙でも紹介した TJCII（第 2 エルサレム会議に向けて）という集会や、最近のいくつかの動きが紹介されました。TJCII については、来年 2 月にインドネシアのマナドの地でアジア大会が開催されることになっており、日本にも招待状が来ています。

韓国チームが特に力を入れて紹介したのは、ニューヨークのブルックリンで今年の夏に開催された「シャローム・エルサレム文化祭」です。韓国文化を紹介するというかたちで、一般のユダヤ人に参加を呼びかけたところ、多くのラビを含む数百人が集まりました。そこで韓国のクリスチャンが、キリスト教の過去の罪を悔い改める告白をしたところ、大きな反響があったそうです。この催しには、ヨセフ・シュラム師も参加され、メッセージを語られました。

■アリ・ソーコラム師（2）

ソーコラム師が 2 回目のメッセージで語られた主題は、「初物の収穫」。師が強調されたのは、順序、あるいは秩序という概念です。兄弟は同等の価値を持っているが、それでも生まれた順序は存在します。福音は「まずユダヤ人に、そして異邦人に」であり、これは優劣ではなく順序なのです。

さて、ユダヤには 2 つの「初物」の収穫祭があります。それは、過越の祭に続く「初穂を献げる」（初穂の祭ともいう）という儀式です。その後毎日、オメル（穂）を数え続け、50 日目にシャブオット（ペンテコステ）が来ます。この間、農夫は毎日、水をやり雑草を抜くのです。その作業を続けることで収穫が完成するのです。

私たちの救いも、始まりに過ぎません。それからオメルを数える必要があります。そうすると完成に至るのです。メシアのからだにも「初物」があり、順序があるのです。

3日目（11月21日）

■タイからの報告

タイのクリサダ・チュサクンタナチャイ牧師らのチームは、2009年のAMF東京大会に参加されたのですが、2011年には大きな洪水があって参加できませんでした。

4年ぶりに参加されたクリサダ師は音声付きのパワーポイントで、活動内容をご紹介下さいました。タイではイスラエルに行く教会がとても少なかったため、まずはイスラエルに人を送り込むことが重要だとのビジョンにもとづき、旅行社が設立されました。クリサダ師らの活動で、千数百人の人々がイスラエルを訪問されたとのことです。

クリサダ師は最後に「フィリピンに続く2017年のAMF大会は、ぜひバンコクで開催したい」と言われ、会場からは大きな拍手がおこりました。

なお、2017年の大会は、複数の国から主催の申し出があり、来年に開催地を決定する見込みです。

■ピーター・ツカヒラ師（2）

2回目のメッセージとして、ツカヒラ師が語られたのは「行い」の重要性です。詳しい内容は、巻頭言（P1）のとおりですが、人々は熱心に聴き入っていました。

ツカヒラ師は、聖書理解の基本的な鍵を、わかりやすく、熱く語って下さいます。ツカヒラ師は「カルメル山スクール・オブ・ミニストリーズ」という、約2週間かけて聖書を学ぶコースを運営しておられます。そうした実績もあって、一般のクリスチャンにわかりやすい形で、的確に基本を押さえたメッセージを語って下さるので、いつも安心して聴くことができます。

■ヤン・タック・ユン師

ヤン師は、今回の会場となった単立コーナーストン・コミュニティ・チャーチの主任牧師で、この集会を成功に導いた功労者の一人です。「友人だから1回限りの特別値引きで」と、ほとんどタダ同然で会場を提供して下さいました。

メッセージの内容は「主の栄光を求めよう」というもの。契約の箱は、ガザの人々に大きな呪いとなり、傾いた箱を直そうとしたウザも撃たれました。神の臨在と栄光は「危険なもの」なのです。

しかし、仮に危険なものでも、私たちはそれを求めたい。箱が車から落ちそうになっても、人間が直す必要がないように、神の臨在によって礼拝が予定どおりに運ばなくても、人間が管理する必要はない、というものでした。

火を吐くような説教で、多くの人が前に出て倒れていました。AMFとしては異色でしたが、これがこの教会の本来の雰囲気のようです。

■インドからの報告

インドは、前回の2011年から参加して頂いていますが、アンドリュー・イェルチュリ師とは昨年夏の準備会でもお会いしているので、すでに顔なじみです。今回は子供2人を含む、一家4人で参加して下さいました。

イェルチュリ師が活動拠点とするゴアでは、イスラエルの若者が、麻薬やニューエイジなどの宗教に触れ、堕落への道を歩んでいるため、そうした人々に福音のメッセージを伝えることが師の活動の重要な部分です。

また、他のクリスチャンたちに、イスラエルの重要性を知らせることも重要で、定期的な集会などを通じて活動を続けている様子をご紹介頂きました。

■アリ・ソーコラム師（3）

ソーコラム師が最後に語られたのは、主要な3つの契約の特徴です。3つの契約に合わせて、わざわざ3冊の原稿を準備し、終わったら横の台に移動させるという念の入れ方には、感銘を受けました。

最初のアブラハム契約について強調されたのは、これが一方的契約であり、また全人類のための契約だということ。つまり、イスラエルが祭司の国民とされ、全世界に祝福を与えるのです。

次に与えられたモーセ契約は、ちょうど病気の検査のようなもの。検査によって病気であることがわかれば、治療をすることができるのです。

そして、治療として与えられたのが、新しい契約です。これは、律法を心に記すというもので、治療と同様に自分からすすんで契約を受け入れなければ、心に律法は記されない。だから、きちんとみことばを学ぶべきだと、師は指摘されました。

■和解の時

アジアには、旧日本軍の残虐行為の記憶だけでなく、インドとパキスタンの紛争、中国と各国の領土紛争など、今も続く争いがあります。シンガポールもまた、マレーシアとの軋轢をかかえています。

各国の代表が前に出て、和解の時を持つというプログラム枠でしたが、リードを任されたジョージ・アナドライ師は、「過去に何度も和解の式典をしたが、単なるショーで何も生まれなかった」と反省。未来に向けた関係が重要だと指摘され、シュラム師に和解の祈りを依頼。次に、各国代表に対して「心に重荷のある国の代表のところに行き、反省ではなく、これからどう相手を祝福するかを語って下さい」と呼びかけ、しばし、祈りと交流の時が持たれました。このアプローチには、賛同する声を多く耳にしました。

ヨセフ・シュラム師

■ヨセフ・シュラム師（3）

ソーコラム師のメッセージを受け、シュラム師は「律法は破られるべきもの」という、あえて逆の視点から語られました。そして「隠された宝」の冒頭にもある囲いの羊の例話を引用し、恐れによる従順よりも、神への愛と熱心が重要なのだと指摘。律法の条項にこだわるのではなく、たとえそれを破っても神に近づきたいという愛を、神は喜ばれると教えられました。

このように、複数の視点が提示され、立体的に聖書が理解できるのが、アジア・メシアニック・フォーラムの「醍醐味」です。シュラム師は「ここ数日のメッセージが、高度な霊的食物だということを、皆さんは理解していますか？」と問いかけておられました。

ユーモアと皮肉を込めたシュラム師のメッセージは、なかなか同時通訳が難しく、通訳者は、かなり苦戦していました。

■村岡丈夫師

村岡丈夫師は、まず、イスラエル建国をリアルタイムで体験した小学校時代の思い出を披露されました。

そして、イスラエルの霊的回復と再臨の関係に言及。自分はもうすぐ 80 歳だが、生きているうちに再臨が見たいと言われると、大きな拍手がありました。

黙示録 14 章と 7 章に登場する贖われた 144000 のイスラエルは、再臨の主を出迎える重要な使命があり、これはどうしてもユダヤ人にやって頂く必要がある。異邦人の役割は、彼らのために祈り、支援することだと訴えました。

そして、AMF 最初の主催国として、イスラエル回復と再臨を祈る重要性を指摘。AMF 参加者に対して、それぞれが知人、友人にイスラエルのために祈るように教えるべきだと呼びかけました。

■ピーター・ツカヒラ師（3）

続けて語ったツカヒラ師は、自分が血統的に 100% 日本人であることを明かし、自分は日本人に重荷があると語られました。そして日本チームを起立させ聴衆に、日本のための祈りを呼びかけました。そして「神の民のために祈れば、神が皆さんの民のことを顧みて下さる」と、重要な原則を語られました。諸国民の救いと、イスラエルの救いはつながっているのです。

最終メッセージでツカヒラ師が語られたのは「神の国」。旧約からずっと聖書の主題は「神の国」でした。旧約聖書の神の国を理解せず、新約だけから神の国を考えると、映画を途中から見たような状態で、本当の意味がわかりません。

神の国においては、それぞれが与えられた能力、賜物に応じて働く必要がある。賜物と召しは、集会で誰かから受け取るものではなく、モーセの杖のように、自分がすでに持っているのだと、師は教えられました。

4 日目（11 月 22 日）

■香港の報告

香港の報告者は、2011 年も参加されたトニー・タム氏。ビジネスマンとしてさまざまな事業を通してイスラエルとつながる、ユニークな人物です。

ヨセフ・シュラム師を中国の三自愛国教会に紹介するなど、ビジネスマンならではの良い働きをされているのですが、報告することが多すぎて、いくら時間切れのサインを出しても話をやめないため、主催者が強引にパワーポイントを切るという、荒業を使って話をやめさせたようでした。

■ン・クン・シェン師

今回の講師の中で、ポスターの写真と実物の差が最も大きかったのが、この人だったことは間違いありません。

ン・クン・シェン師

師は、もともとの出身はバプテスト教会ですが、聖霊体験を経てから、なぜか聖公会に移り、大きな教会の主任牧師に就任しました。ところが、着任早々に青年たちが「仮庵の祭」をしたいと言い出したのです。やめさせるのは良くないと考え、やらせたところ、メノラ、ショファー、タリートと「わけのわからないもの」が続々と登場し、不思議に思っていろいろと学び始め、例祭の重要性に気付かされたとのことでした。

クリスチャンは、旧約の中でなぜかマラキ書の十一献金だけを重視しているが、主の祭をはじめ、もっと聖書を知るべきだと語られました。

ン師は、当然のことながら聖公会の中では異端視されているようで、聖霊体験もあるし、自分は何者なのかわからないような状態と言い、最後に「しかし私はメシアニックだ」と言われると、大きな拍手がありました。

■ギルバート・カルディゲス師

最後にマイクを持ったカルディゲス師は、シンガポールでの働きについても報告。自分がイスラエル関連の働きに導かれたのは、高級ホテルで開催された過越の食事に招待されたからだと明かしました。タダで食事ができると聞いて参加したところ、過越の祭の重要性に目が開かれたとのことでした。クリスチャンによる残酷なユダヤ人迫害にも言及、再臨に関するユダヤ人の役割も指摘されました。

そして AMF は「組織」ではないと強調。F はフォーラムというよりも「ファミリー」の F なのです。回を重ねるごとに AMF に参加する指導者たちの間には友情と信頼が生まれて、まさに「ファミリー」になりつつあるというのが実感です。

■旗の引継ぎと閉会

シンガポール代表からフィリピン代表に手渡された大会旗

最後を飾ったのは、大会旗の引継ぎでした。40 人の代表団を送り込んだフィリピンは、代表者数人が前に出て旗を受け取り、開催の決意を表明されました。

カルディゲス師は最後に、この集会のために仕事を休んで働いてくれたボランティアに感謝を表明。また、後ろの祈祷室でずっと集会のために祈ってくれていた執り成しの祈り手にも謝辞を述べておられました。

最後に

カルディゲス師の教会は、フィリピンからシンガポールに出稼ぎに来ている人を中心にした、わずか数十人の小さな教会です。ですから、実行チームのほぼ全員が他の教会や団体のメンバー。それにもかかわらず、全スタッフが心を一つにして働いている様子は、本当に素晴らしかったと思います。

日本チームは、会場の様子が不明で、事前のコーディネイトが不十分だったのですが、同時通訳ボランティアをはじめ、多くの皆様にご協力を頂き、無事終えることができました。日本から高価な航空券を負担して、約 50 人の方々にご参加頂いたことに、深く感謝申し上げます。今後、AMF は各国で開催されて行くものと思いますが、人の思いではなく、神の御心が成就し、神の栄光だけが現されるようにと祈ります。

Netivyah
Bible Instruction Ministry
ネティブヤのコーナー

エレミヤに学ぶ　ネティブヤセミナーレポート

大阪集中セミナーの様子

11月初めに、ネティブヤからヨセフ・シュラム師とマーシャ夫人、そして秘書のハナ・コブナーさんが来日されました。大阪、名古屋、東京でエレミヤ書に関するセミナー、京都ではマーシャ夫人とハナさんによる女性セミナーがありました。ここではエレミヤ書セミナーの前半の要旨をお伝えします。

■預言者の召し

多くの預言者は、神から預言者になる事を命じられた時に、その召しから逃れようとしています。イザヤ（イザヤ書6）やモーセ（出エジプト記3）もそうでした。エレミヤも「ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいか知りません」（エレミヤ書1:6）と言っています。これらの預言者は、自分の意志で預言者になったのではなく、神が彼らを召し、ほとんど強要して預言者としたのです。

エレミヤ書1:10でエレミヤに命じ、仕事を説明しています。それは、まず抜き、こわし、滅ぼすというものでした。最近の教会では、牧師は最後の審判や悔い改めなどの厳しい、否定的な事はあまり教えません。しかし、神がまずエレミヤに命じたのは、その否定的な事だったのです。

■荒野のハネムーン

エレミヤ書2:2は、イスラエルが出エジプトの時に荒野で過ごした40年間が理想的なハネムーンだったという、預言者やユダヤ教に共通する見方です。キリスト教神学では、イスラエルが神に苦情ばかり言っていたひどい時期だと考えていますが、ユダヤ人から見ると、これがなぜ素晴らしい時期だったのでしょうか。

まず、神がいつも民と共におられました。雲や火の柱というかたちで、イスラエルの民は神の臨在を目で見ることができました。牧師はしばしば信徒から、私はどこに居るべきか、また行くべきか神の意志がわからないという質問を受けますが、この時にはそんなことはありませんでした。雲の柱がとどまっている時はそこにとどまり、動けばついて行くというかたちで、神の臨在と意志を全員が正確に知っていたのです。イスラエルの民は、全員が直接その耳で神の声を聞いたのです。これだけ多くの人々が直接神の啓示を受けたのは、歴史上で一度だけの出来事です。

人々が文句を言うと、それに神がすべて答えられたことにも注目してください。40年間、神は超自然的な方法で、毎日の必要を満たされました。敵が現れると神ご自身が敵と戦って民を守られました。そして、イスラエルの民が、神に完全に依り頼んで生活するという、神と人との理想的な関係が実現していたのです。

■初めの愛

エレミヤ書2:3から、私は黙示録2章に書かれているエペソの教会へのことばを思い起こします。4節の「初めの愛」とは何かと牧師の皆さんに聞くと、十字架や神などの答えが返ってきますが、イザヤ書49章や62章を読めば分かるように、神にとって初めの愛とはイスラエルの事です。黙示録が書かれた1世紀の末は、教会がイスラエルの事を忘れて置換神学が芽生え始めていました。

イスラエルが神の初めの愛であるなら、教会にとっても初めの愛であるべきです。イスラエル抜きの教会は、偶像崇拝と大した違いはありません。イスラエルの民とその歴史、預言は、イエスが神の子でありメシアであることを裏付けています。大部分の教会はイスラエルを忘れることによって、結局イエスを忘れてしまっているのです。

■しつこく祈るべきこと

7:16に驚くべきことが記されています。クリスチャンの皆さんは、祈ればいつでも聞かれると考えますが、実はそうではありません。祈りが聞かれるのにも限度があるのです。

では、神に命じられたエレミヤは祈るのをやめたでしょうか。そうではありませんでした。11:14と14:11で、神は繰り返し祈るのをやめるように命じており、これはエレミヤが祈り続けたことを意味します。どうして彼は祈るのをやめなかったのでしょうか。それはまず、彼はイスラエルを愛していたので、たとえ聞かれないと分かっていても、執り成すべきだと考えていたからです。そしてもう一つの理由は、しつこく祈り続ければ最後に神は聞かざるを得ないことを知っていたからです。

アブラハムもモーセも神と取り引きをしています。皆さんもイスラエルや兄弟姉妹、日本人のために恵みや憐れみを祈る時、あきらめずしつこく祈ってください。

■宗教的行いより神との関係

エレミヤ書7:21~23には驚くべきことが記されています。レビ記の前半は犠牲に関して詳細に記されているはずですが、神はそんなことは命じていないと言うのです。これは他の預言者も語っていますが、神にとっては行動よりも心の動機の方がはるかに重要だということです。これと全く同じ理由で、イエスはパリサイ人を批判しています。

神との関係を献金や、集会への出席などの外見で測る事はできません。犠牲などの行いが中心ではありません。神が望んでおられるのは、23節に記されているように神の声を聞く事、神を神として受け入れ、自分たちが神の民であることを認めて、神に従う事なのです。偶像とは違い、イスラエルの神は人に何かをしてもらう必要がありません。神は、私たちと交わりを求めておられるのです。

ネティブヤセミナー DVD 発売のお知らせ
大阪セミナー全体と京都の女性セミナーを収録したDVD（2枚組 2,000円）は、1月に発売予定です。お申し込みはシオンとの架け橋出版部まで。
TEL **078-341-7501** FAX **078-341-7502**
ホームページ **www.zion-jpn.or.jp**

ネティブヤ女性セミナーレポート

京都で行われた女性の会

女性セミナーでの賛美の時

11月7日に京都グローリーチャーチで、ネティブヤから来られたヨセフ・シュラム師夫人のマーシャさんと、秘書のハナ・コブナーさんによるセミナーが行われました。特に女性の視点から語っていただきたいとの趣旨で、女性セミナーと銘打って行われたことからスタッフ以外はほぼ全員女性で、約50人が参加されました。四国地方や名古屋などから来られた方もいて、関心の高さがうかがえました。

京都グローリーチャーチの皆さんの心のこもったおもてなしもあって、明るく和気あいあいとした、素晴らしい会となりました。

■出会いと初期の迫害

吉田あんな先生のお点前をいただくマーシャさん

マーシャさんは、シュラム師とのなれそめと、ネティブヤの創成期の迫害について語られました。

シュラム師がアメリカで学んでおられたときに、マーシャさんとどのように出会われたかという話は今までほとんど聞いたことがない興味深いものでした。

また、参加者は、ほぼメシアニック・ジューのことをご存じの方ばかりで、イスラエルにおけるメシアニック・ジューの置かれている位置はある程度理解されていましたが、実際に体験されたマーシャさんのお話は心に触れるものがあったようです。日本ではイエス・キリストを信じているからといって迫害されることはほとんどありませんので、実際に迫害に遭った話を、当事者から生で聞くのは初めての方が多かったようです。

ある夜、家に超正統派の人が訪ねて来て、ドアを開けた途端に生きたネズミが何十匹も入ったカバンを家の中に投げ入れられた話など、多くの方が大変驚いておられました。

■ハナさんのメッセージ

ハナさんは、マタイの福音書1章の、イエス・キリストの系図に出てくる4人の異邦人女性について語って下さいました。この話は、異邦人であるといった理由で聖書の立場からは問題があると考えられるタマル、ラハブ、ルツ、バテ・シェバが信仰とその行いによってイエス・キリストに連なることができたというテーマでよく話されますが、ハナさんの切り口はそれとは少し違うユダヤ人独特のものでした。

ハナ・コブナーさん

この4人の女性は生まれだけでなく、行いも悪かったにもかかわらず、キリストの祖先として聖書に言及されているという受け取り方だったのです。確かに、この4人は聖書的に見て、良いとはいえない行いをしています。タマルは遊女の格好をして義父をだまして妊娠しましたし、ルツもボアズの足元で寝るなど、当時では考えられないような行為をしています。彼女たちは何らかの印を相手からもらい、それを用いて取り引きをするなど非常にしたたかな女性でした。そして、神はそんな女性たちをダビデの一族、イエスキリストの先祖として用いておられるのです。

■ネティブヤの現状報告

また、ネティブヤの秘書であるハナさんから、ネティブヤの現状について、会堂の改修工事などの話をして頂きました。ネティブヤの若者も順調に成長し、世代交代が進んでおり、今後が非常に楽しみだとのことです。兵役に就いている人も多いので、その人たちのために祈ってほしいとの事でした。ハナさん自身もルーベンさんという21歳の子息が兵役に就いており、まさに母親として話をしてくださいました。

■次回への期待

今回はネティブヤから二人の女性にお越しいただき、面白い話を聞くことができました。ヨセフ・シュラム師のセミナーとは違い、明るく柔らかい雰囲気で、来てくださった方も喜んでおられました。また、話の内容や切り口も異邦人や、男性とは違って非常に新鮮なもので、大変好評で、遠方から来たかいがあったとの声も、聴かれした。

非常に忙しい方々ではありますが、またの機会を楽しみにしているという声も多く、再び、このような機会がもたれることを祈りたいと思います。

順調に進む会堂改修工事

現場の塀に書かれた嫌がらせの落書き

ネティブヤの会堂はすでに解体作業を終え、地上3階・地下1階の建設が着々と進んでいます。現在（11/18）は2階の工事を行っているところです。

会堂のほか、会議室や子供・ユース活動のスペース、オフィス、スタジオ、小ホールやビリーバーの若者のための働く場となるカフェも作る予定です。

会堂の改修中は事務所の一角で礼拝が行われていますが、スペースが足りないため、メンバーやゲストが廊下にはみ出すような事もあります。工事のためだけでなく、工事の間メンバーが守られるようお祈りください。

皆様の温かいご支援に心から感謝し、引き続き皆様のご支援をお願いします。

ユダ・バハナ

バル・ハバー 2013

恵みの天幕聖会と執り成しの旅レポート

最後の集会の証しの時

6回目を迎えた「聖会と執り成しの旅」(10月14~24日)は、19カ国から150人が集い、聖地イスラエルで開催されました。聖会を通じて、主催者、参加者相互の絆は一層深まり、約束の地に主を再び迎えるために求められる信仰について、改めて考える機会となりました。エイタン・シシコフ師のシャバットメッセージ、訪問先であるネツェル・ハガリル（ナザレ）のリーダー、ハサノフ・バキフ師の心を打つことばを要約します。

アブラハムと個人的なリバイバル　エイタン・シシコフ師

私は41年前、イェシュアに巡り合いました。言葉を交わした訳ではありませんが、目と目を合わせたのです。

ニューメキシコ州の山奥で、深い悲しみで絶望の淵にあった時、自分では考えてもいなかったことでした。当時、罪や十字架に対して何の理解もなかった者でしたが、イェシュアに向き合ったとき神の赦しを知りました。私は神から離れて生きていましたが、「永遠とは何か」をいつも心にとめていたのです。

今日のトーラーポーションは、創世記18:1~22:24です。まず18:1で、主はマムレのテレビンの木のかたわらでアブラハムに現れます。創世記12章、17章に比べてドラマチックな出会いではありませんが、共通する事はいずれも主に犠牲を献げることを求めているのです。今日のパラシャには、出会いと犠牲という二つの要素が込められています。私自身が、コングリゲーションで語ってきたことの一つに、「個人的なリバイバル」があります。リバイバルとは、イェシュアと顔と顔を合わせる事です。なぜリバイバルは、メシアに焦点が置かれているのでしょうか。アブラハムは信仰と共に歩み、約束の子を授かりました。その子は、やがて現れるイェシュアのひな型なのです。創世記18章で、主（アドナイ）と3人の人々が訪ねて来ました。アブラハムが地にひれ伏し、「主よ、もしあなたの目に恵みを見つけたなら」と語ると、彼らは、「わたしは必ずあなたのところに帰ってくる」と約束し、「サラに子が与えられる」と述べました。この出来事は、イェシュアが生まれる2000年前の事です。神は、アブラハムと顔と顔を合わせて語られたのです。アブラハムに神が現れたのなら、私たちにも現れるはずです。

■神と顔と顔を合わせる

私の好きな聖句の一つは、IIコリント4:6「イェシュアの顔に輝く神の栄光の知識」で、イェシュアにこそ、神の栄光が表れているのです。また民数記6:25にも、「主が御顔をもってあなたを照らし」とあります。ところで、「顔」という事について出エジプト記25:30に、幕屋の中の机の上に、「顔(存在)のパン」という特別なパンが置かれていると記されています。ヘブル語で「レヘム・パニーム」といい、口語訳聖書では「供えのパン」と訳されています。しかしパニームとは「顔」「存在」を意味し、アロンの祝祷（民数記6:23~26）の中でも、「神の顔」という言葉が2回も出てきます。それだけ、顔と顔を合わせることは大切な事なのです。皆様も、神と顔と顔を合わせて下さい。恵みの天幕のネットワークや皆様との関係も、全てアブラハムと神とが出会ったように、神との出会いの場となるのです。関係があってはじめて、全ての物語は始まります。アブラハムはどのように神とつながることができたのでしょうか。それは、「従う」という事でした。

ところで、神は人を創造し命の息をその鼻に吹き入れ、人を生きる者とされました。さらに、死んだ者をよみがえらせることもできるのです。エゼキエル書37章には、「あなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす」とあり、非常に枯れていた骨に息を入れ、イスラエルを生かしたのです。ヘブライ語では、霊と息とは同じ「ルアハ」です。ルアハを吹き入れて頂くには、神に近づかなければなりません。ヤコブ4:8の、「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう」とあるように。

■リバイバル

ケニヤのチームによる賛美

創世記22章には奇跡と復活が記されていて、その10節で、神はアブラハムを試みるために呼びかけます。彼は、「ヒネニー」（はい、ここにいます）と即答します。このように、神は一人ひとりの名前を現実に呼んでおられるのです。リバイバルとは、まず「聞き」、そして「答える」ことから始まります。申命記6:4には、「イスラエルよ、聞け」（シェマー・イスラエル）と、神は命じておられます。イスラエルはアブラハムのように、神にこたえる必要があるのです。

さて、アブラハムがこたえると、12章で使われた「レフ・レハー」（行け）という強いことばが再び現れ、モリヤの地でお前の愛する子、唯一の子イサクを燔祭としてささげるように命じます。まるで獣を殺すように、「屠殺せよ」（リシュホット）と命じたのです。人には全く理解できない命令です。こ

のことばに従うには、自分の「思い」という命を殺してしまわなければとてもできません。私たち自身の思い（命）を犠牲にしなければならないのです。個人的に一番大切にしているものつまり、自分自身の思い（命）を祭壇に献げる事が求められているのです。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう」（ルカ 9:24）とイェシュアも語りました。イェシュアのために自分の命を捨てること、これがリバイバルの出発点となるのです。

■主に従い、主に委ねる

アブラハムは、非常に困難な決断を迫られました。神の意志を行うことの困難です。ゲッセマネの時のイエスも、まさに同じでした。「どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」（マルコ 14:36）と、主の御心に委ねたのです。アブラハムの行為は個人的なリバイバルだけではなく、歴史のリバイバル、全ての事のリバイバルを意味します。これらのことが行われた場所はモリヤ、つまりエルサレムです。イエスもエルサレムで殺され、そしてよみがえられたのです。

こうして神が選ばれた場所にアブラハムが行ったように、私たちも神が選ばれたところに今いるのです。アブラハムが自分の愛するひとり子を、獣を殺すようにまさに殺そうとしたその時、主の使いが天から、「アブラハムよ、アブラハムよ」と 2 回も呼びかけました。アブラハムはここでも「ヒネニー」と答え、神に従ったのです。その結果、主は創世記 22:15~18 の通り、アブラハムとその子孫が敵の門を打ち破り、地のもろもろの国民はその子孫によって祝福されることを誓われたのです。

私たちは神に従い、神に委ねるためにだけこの地にいます。主に従うということが信仰であり、つまりリバイバルなのです。ピリピ 3:7~10 でパウロは、「キリストのゆえにわたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それはキリストを得るためである」と告白し、「キリストのうちに自分を見いだすようになる」と証しています。

神こそ命の本源です。「われわれは神のうちに生き、動き、存在している」（使徒 17:28）のであり、それ以外に「生きている事実」はありません。こうして呼吸をしていることも、主が与えている命です。神から離れて生きることなどあり得ないのです。この事実を認め、神と共にある命を味わう時、神の国に生きているのです。そしてイェシュアにおいてはじめて、自分という思いを乗り越え、私たちが生ける神と一つである事実に導かれるのです。IIコリント 4:10 には、「いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」とあります。ぜひともこのみことばを受け止めて下さい。イェシュアのために自分を捨ててはじめて、イェシュアの新たな命に生きることができるのです。アブラハムは神の命令に従い、そして神に委ねました。イェシュアも同じように父に委ねたのです。

再臨の成就、御国をこの地上に成就するために、イスラエルは悔い改める必要があります。今、一人ひとりに個人的なリバイバルが求められています。主の栄光を現わすために、神と顔と顔を合わせ、日々「ヒネニー」と、その呼びかけにこたえて下さい。

ネツェル・ハガリルの紹介

ハサノフ・バキフ師

ツィポリの野外劇場で語るバキフ師と聴衆

私はレオン・マジン師の後を継ぎ、2010 年からこのコングリゲーションを導くようになりました。現在メンバーは 20~25 人程の小さなコングリゲーションで、メンバーの多くは旧ソビエトからの帰還者であるため、ロシア語で集会をしていますが、必要に応じてヘブライ語でも語ります。

私たちの活動の 1 つであるスープキッチンは、市役所から要請を受け、アラブ人、ユヤダ人の区別なく約 70 家族を援助しています。現在ナザレでは、イエスがこの地で成長したことも知らない若者が多く、麻薬に手を出す者、密売人もいておおよそ「主の町」らしからぬ人々が多く生活しています。おしなべて、ナザレの町のイエスに対するイメージは、イエス在世当時とあまり変わらない状態で、時にこれが聖なる民の国なのかという疑問がわいて、自分たちの弱さを感じることもあります。しかし私には夢があります。それは子どもたちに神の真実を伝え、メシア・イェシュア以外にイスラエルの神がいないことを宣べ伝え、神の望まれる町をこの地に興すことです。そのために、人に頼むのではなく神に依り頼み、神の力を信じて人々を育てて行きたいと願っています。どうか私たちの働きのためにお祈り下さい。

■聖会に参加して

ネツェル・ハガリルの現実は、今日のイスラエルが直面する課題の縮図です。神が求めるイスラエルの回復のために、一層の執り成しが求められています。聖会期間中、参加者から、「主の再臨を成就するために、私たちは具体的に何をしなければならないのか」という質問がありました。末の時代、イスラエルがその民族的使命に心を開き、異邦人はイスラエルに奮起を促す信仰（ローマ 11:11）が求められています。神のご計画全体に心を留めながら、その御心を動かす信仰が、今私たち自身に求められていることを改めて自覚しながら帰国の途に着きました。

日本語の名称は「哀れみの天幕」の方が正確な翻訳ですが、日本語の語感を考えたエイタン・シシコフ師の要望により、「恵みの天幕」としています。

シシコフ師の執り成しのニュース（電子メール）をご希望の方は、abe@zion-jpn.or.jp　までご連絡下さい。

崩壊していく世界は「回復」するのか？

レオン・マジン師セミナーレポート

大阪集中セミナーの様子

9月末から10月初めに来日された、レオン・マジン師は「世界の回復」という、ユニークな視点から語って下さいました。マジン師はイスラエルのメシアニック運動の次世代指導者の一人で、ロシア語の神学校（ハイファ神学校）を運営するなど、影響力のあるリーダーです。

■私の証ーソ連でのリバイバル

私は旧ソ連で生まれました。無神論の国で 1985 年、聖霊が働き始めました。そして2つの奇跡が起こったのです。

第1の奇跡は、何千、何万という人々が救われたことです。当時、多くの宣教活動がなされましたが、そのやり方は稚拙でした。音楽で人を集め、聖書を少し朗読します。その箇所は、よく考えられた箇所でもなく、説教者自身、よく理解できないような箇所なのです。ところが、「イエス様を信じたい人」と呼びかけると、何十人の聴衆の大半が応答するのです。

第2の奇跡は、ユダヤ人のイスラエル帰還です。大学の同級生の、3分の2はユダヤ人でした。皆、ユダヤ文化を失っているのに、「黄金のエルサレム」などの歌が聞こえてくると、訳もなく涙がこぼれるのです。全く理屈では説明できない現象でした。

イスラエルの暮らしの方が楽だから、多くの人が移民した訳でもありません。私の父は裕福でしたが、移民時は 800 ドルしか持ち出せなかったのです。そのようにして、150 万人が移民しました。これは神の業です。その中から多くのビリーバーが起こされました。イスラエルの2万人のメシアニック・ビリーバーのうち過半数はロシア語を話すと言われます。

エレミヤ 23:7~8 に、「人々は……『イスラエルの家の子孫を北の地と、そのすべて追いやられた地から導き出された神は生きておられる』という日がくる」と記されている通りです。

■世界の修理による回復

さて本題の、世界の回復についてです。世界の回復は、ヘブライ語で「ティックン・オラム」（ティックンは修理・回復すること、オラムは世界）と言います。これは新約聖書にも出て来ます。

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった。」（使徒行伝3:19~21、口語訳）

つまり、再臨とは「万物更新の時」で、これこそ「ティックン・オラム」です。多くのクリスチャンは、イエス様によって罪赦され、救いを受け取ると、天国に行く「切符が与えられた」と考えます。それは正しいのですが、落とし穴は、この地上の生活を単に、「天国行きの飛行機が出発するまでの待ち時間」と考えることです。そうではなく、私たちは地上ですべき仕事があるのです。

■不完全なマンションのたとえ

たとえば私がマンションを建て、皆さんがそれを買って住みます。完成時は素晴らしいマンションでした。ところが何年か後に、実は建物に問題があったことが判明します。私は新たに、完全なマンションを建てて質問します。「皆さん。新しいマンションに無料で移って頂けますか？　もし嫌なら、お金を払い戻します」。皆さんはどちらを選びますか？

私なら払い戻してもらいます。最初の建物を完全に建てられなかった建築家が、次の建物を完全に建てられるでしょうか。世界もそれと同じです。神が創造された世界が、人間の罪によって台無しになったとしたら、仮に新しい天地が創造されても、また同じ問題が起こるでしょう。神は、今の世界を廃棄して違う世界を創造されるのではなく、この世界を〝修理〟され、回復するのです。

■アダムの堕落から人の能力は低下した

神が創造された世界は完全でした。神は創造の各段階で「トヴ」（良い）と言い、最後に「トヴ・メオッド」（完璧！）と言われました。

アダムは完璧でした。アダムは地を支配する使命を与えられました。Ⅰコリント 10:13 の原則から考えれば、アダムには園を守る力がありました。彼はサタンから園を守っていたのです。

また、神は助け手として多くの動物を連れて来られました。アダムはそれらに即座に名前をつけました。ヘブライ語では、動物の名前には全て意味があります。たとえば犬は「ケレヴ」ですが、それは「ケ・レヴ」つまり「心のような」という意味です。動物を見ただけで、その性質を見抜く事ができたアダムは、驚くべき能力を持っていました。現在の人間は、脳細胞の5~7%しか使っていませんが、人工衛星を飛ばせます。もし 100%発揮したら！　だから、イエスは「第二のアダム」と呼ばれのです。

アダムとエバはその状態を失いました。ミドラシュの解釈では、エバは間違って、善悪を知る木に「触れてもいけない」と誤解したのです。これは、一見安全な誤解のように思えますが、ヘビがその木に巻きついていたことがエバに疑いを起こさせました。「触れると死ぬ」はずの木に蛇が「巻き付いて」

札幌で開催された教職者セミナー

も生きていたからです。

そして彼らは神と対面しました。日の涼しい風の吹く時、と訳されていますが、ヘブライ語では風＝霊（ルアハ）なので、これは霊の働く日とも解釈できると私は思います。それは安息日だったのかも知れません。

神と1週間ぶりに会う日に、彼らは神の前に出ることができず、神との関係を失いました。これが第1の破壊でした。霊的な低下は、彼らの肉体にも影響を与えました。

クリスチャンの多くは、神が獣を殺して犠牲とされ、その皮で衣を作られたと考えます。

しかし、ミドラシュには、人は罪を犯す前には神の臨在に覆われており、もっと硬い皮で覆われていたという教えもあります。神の臨在を失って、人間は現在のような傷つきやすい皮膚になったので、衣が必要になったというのです。

しかし、堕落した後のカインも、すばらしい能力を持っていました。アベルを憎み、殺そうとしたカインに、神は「罪が門口に待ち伏せているから、それを治めなさい」と言っておられます。それは、カインには罪を治める能力があったからです。まだ彼らには80%の能力が残っていたのです。

■洪水による破壊

さて、創世記の6章に来ると人間はかなり悪性になっています。それは、「神の子」たちが人の娘と結婚したからだと聖書は言っています。どういう意味でしょうか。これにはいくつかの解釈がありますが、ミドラシュでは、この「神の子」は、堕落した天使だと言います。天使が人間のレベルにまで堕落して結婚したと考えるのです。

天使は命じられた一つのことしかできないが、人間は同時にいくつものことができるので、天使は人間に魅せられたとミドラシュでは考えます。

とにかく、こうして堕落した人間は恐ろしい罪を犯すようになりました。ヘブライ語では、罪に関して軽いものから重いものまで3段階あるのですが、ここで出てくるのはそのいずれでもなく「ハマス」という特別な言葉で、それは神の前で意図的に罪を犯す重罪なのです。

ノアの洪水の時に何が起こったかを理解する上で、創世記6:5以下と8:20以下の記述は参考になります。両方とも、「人がいつも悪いことを考える」と言っているのですが、洪水前は「だから滅ぼす」という結論になり、洪水後は「だから滅ぼさない」という結論です。これは筋が通りません。

2人の人間が同じ罪を犯したのに、片方が罰を受けて、片方が無罪放免されたら不合理です。でも、片方が25歳で、片方が5歳だったら筋が通るでしょう。それと同じように、洪水後は人間の能力が大幅に低下して子供並みになってしまったのです。

ユダヤの考えでは、洪水の前の人間には、自然に対して影響を与える力があったと考えます。人間の力があまりに強く、このままでは自然を台無しにしてしまう可能性があったので、神は人を取り除かざるを得なかったというのです。洪水の際に、人間は自然との関係を失ったのです。人間の寿命も、それに応じて短くなりました。

■バベルの塔による破壊

洪水を生き延びたノアと、その息子セム、ハム、ヤペテから70の民族が誕生しました。それぞれの民族は、ノアの与えた祝福と呪いを通じて、それぞれの運命を与えられることになります。ノアの祝福にはそれだけの力がありました。

ノアが、悪事を働いたハムを呪わず、その息子のカナンを呪ったのは、神がハムをすでに祝福しておられたからです。神が祝福されたものを、人が呪うことはできません。私たちがキリストの祝福を受ければ、誰も呪うことができません。

また、セムではなく、セムの神をほめたことにも注意が必要です。たとえば食前の感謝で食物を祝福する人がいますが、私たちユダヤ人は食物を祝福せず、食物を創造された神を祝福するのです。

さて、人々は洪水によって再び滅ぼされることを防ぐために、バベルの塔を作ったともいわれます。とにかく、バベルの塔は神に対する挑戦でした。ですから、神は天使を送って塔を崩せばよかったのですが、そうはされませんでした。

どうしてでしょうか。それは、まだ人間の力が強かったので、天使では対抗できなかったのだと、ラビたちは考えました。私の考えでは、洪水後の人間は、まだ40%くらいの力が残っていたのだと思います。

しかし、バベルの塔の後、人と人との関係が失われ、人間の能力は現在と同じ5~7%のレベルまで低下してしまったのです。

■回復のプロセス

こうして最低のレベルまで低下した人を回復させる最初のプロセスはアブラハムだったのです。彼の一家を通じて、神は回復のプロセスを開始されるのです……（以上はメッセージ要旨。回復のプロセスはDVDでどうぞ）。

レオン・マジン師セミナー DVD
崩壊していく世界は「回復」するのか？好評発売中

参加者から大変好評だった、レオン・マジン師公開セミナーのDVDが好評発売中です。大阪集中セミナーの3セッション正味5時間あまりがすべてDVD1枚に収録されています。

価格　**1000**円
（送料込み）

ご注文はシオンとの架け橋出版部まで。

TEL　**078-341-7501**
FAX　**078-341-7502**
ホームページ **www.zion-jpn.or.jp**

AMF2013 シンガポール大会　関係者の感想

■講師と主催者より

すべてのティーチングが素晴らしく、メシアのからだの回復に関するものでした。2015 年のフィリピン大会のために、すぐに祈り始めましょう。　ヨセフ・シュラム

多くの国々から多くの人々が集まり、素晴らしいティーチングと賛美、交わりでした。私たちの神を畏れ敬います。本当に神は素晴らしい方です。　ギルバート・カルディゲス

■関東地方の参加者から

●アジアのハブであるシンガポールが開催地に選ばれたのは、神の業だと思います。イスラエルにねたみを起こさせるように、アジアが一つになって祈れるように願っています。

●新しい一人の人として、アジアがキリストにあって一つになる方向性が打ち出された集会でした。

●多くの教会や団体を一つにまとめて聖会を行うのは容易なことではないと思うが、カルディゲス師はよくまとめておられました。

●日本の私たちが永年歌って来た賛美を、アジアから集まった人々が一緒に歌ってくれたのは良かったです。

●とても素晴らしい集会でした。イスラエルのために祈る多くの人々が集まったのは、非常に良かったです。

■中部地方の参加者から

●各国のお国柄により教会の個性が表れていて「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから」（黙示録 7:9）の幻を見ているようでした。

●日本人は日本人のままで、ユダヤ人もユダヤ人の文化を持ったままで御前に立つべきだと強く感じました。

メッセージする
村岡丈夫師

●アジアに対する重い歴史的負債を感じつつ出席しましたが、村岡師のメッセージと、ピーター・ツカヒラ師の祈りの呼びかけで、隔ての壁が崩れるのを全員が感じました。

●イスラエルを助け励ますのがAMFですが、今回は日本が一番励まされました。

●ＳＪＣＦ（現地の日本人教会）の方々も多く来られ、感動しておられました。これからは、アジア各国の日本人教会の働きも覚えて祈ります。

●日本にイスラエルの使命が与えられたのは、イスラエルを通して、アジアと一つになるためだと実感しました。

■近畿地方の参加者から

●多くの講師がメッセージの主軸として語った「パラダイムシフト」が、強く心に残りました。

大会前のレセプションでの
ケーキカット

●大きな集会では、お金が足りないのが通例ですが、早々に十分な資金が集まったのは、神の祝福だと思います。

●シンガポールからの参加者には、初めてイスラエルのメッセージを聞く人も多かったようで、各国を持ちまわる形式は、重要な意味があると思います。

●ソーコラム師のメッセージは、わかりやすくて良かったです。シンガポールの人々は、国際的イベントに慣れているのか、とてもスムーズに運営されていると思いました。

●今回の集会で蒔かれた種が、シンガポールで、また次回の開催国のフィリピンでどう成長して行くのか期待したいです。メッセージの方向性は、AMFのビジョンに沿っていると思いました。

●同時通訳を長時間にわたり聞いたので、とても疲れました。ヘブル・クリスチャンと、メシアニック・ジューの立場の違いも語って欲しかったです。

●１８カ国も集まったのは神の恵みだと思います。バプテストから聖公会に移って牧師になったン・クン・シェン師の話は、神の業を象徴しているようで、とても印象的でした。

●アジアが一つに集まったのは良いことです。これが、信仰による完全な一致となるように、前進する事を願っています。

●全てのセッションで、聖霊の導きと熱い神の臨在を感じました。この集会を主が用いておられることが、よくわかりました。

Jewish Calendar

３月 16 日　プリム חג הפורים

エステル記に記された、ユダヤ人殲滅計画への勝利を祝う祭り。最近のイスラエルでは、多くの人が仮装をして祝う。

４月 15 日　ペサハ חג הפסח　過越しの祭

出エジプトによる奴隷状態からの解放を記念する祭。レビ記 23 章によれば、初日の「過越しの祭」(5 節)、7 日間の「種なしパンの祭」（6 節）と現在は祝われていない「初穂の祭」(10 節)3 つの祭が組み合わさった祭だった。最後の晩餐は、この祭の最初の夜に行われる「セデル」と言う儀式的な食事だったと考えられる。

シオンとの架け橋事務局

〒 650-0027　神戸市中央区中町通 2-2-18　平戸ビル 4F
TEL　（078）341-7501　FAX　（078）341-7502
e-mail : news@zion-jpn.or.jp　HP : http://www.zion-jpn.or.jp

献金受入口座　郵便振替 00930-5-241773「シオンとの架け橋」

1. ネティブヤ、オハレー・ラハミーム、マオズ・イスラエル、ピーター・ツカヒラ師、カスパリセンターへの献金と明記されている場合は、全額を宛先の団体に送金させていただきます。
2. 「イスラエルのメシアニック・ジューのために」と指定の献金は、全額をイスラエルのメシアニック関連団体に献金させていただきます。おもに 1. 以外の団体に、配分します。
3. 上記以外の特定の目的や団体のための献金をご希望の場合は、ご連絡ください。可能な範囲で対応させていただきます。
4. シオンとの架け橋のための献金、及びご指定のない献金は、イスラエル回復のための、国内外でのシオンとの架け橋の働きや、その他の働きにあてさせていただきます。

※シオンとの架け橋は、単立教会の「聖書研究会」が運営しています。